

産大法学 43巻3・4号 (2010. 2)

研究ノート

## 追悼としての政治

——エルンスト・ユンガーの戦争体験解釈について—— (上)

川 合 全 弘

戦友よ、君たちの価値は消え去らない。君たちの記念碑は、共に炎の輪の中に立った、君たちの兄弟の心に深く刻まれている。……我々は多くのものを、ひょっとしたら全てを失った、名誉さえも。ただ一つ我々に残されたもの、それは、君たちと、これまでにおいて最も堂々たる軍隊と、これまでにおいて最も力強い戦闘との、輝かしい記憶である。

(エルンスト・ユンガー『鋼鉄の嵐の中で』初版序文)

戦死者から受けた忘れがたい恩義、我々各々が彼らのことを片時も忘れてならない深い義務は存在しないだろうか。我々はそもそも彼らのおかげで生きているのではないだろうか。それゆえ我々が彼らをも我々の内心に生かすことは、正当なことではないだろうか。

(エルンスト・ユンガー編著『忘れえぬ人々』まえがき)

追悼演説におけるペリクレスの有名な言葉を信じるならば、ポリスは、あらゆる海と陸を制圧して自分たちの偉業の舞台となした人びとに、……他の助けを借りずに、協力して自分たちの正しい行為と誤った行為の永続的な記憶を樹立することができ、それを通じて、現在と将来の人びとに賞賛の気持ちを起こさせることができる、という保証を与える。……ポリスという組織は、物理的には都市を囲む壁で守られ、外形的にはその法律によって保証されているが、後続する世代がそれを見る影もないほどに変えてしまわない限りは、一種の組織された記憶なのである。

(ハンナ・アーレント『人間の条件』)

## 1 はじめに

第一次大戦の復員兵エルンスト・ユンガーは、戦没した戦友に対する追悼の念から、戦後、『忘れえぬ人々』と題して、選ばれた44名の戦死者に各一篇の弔文を捧げる大部の追悼文集を編んだ。<sup>(1)</sup> ユンガー自身は、これに、まえがきとあとがき、ならびに「カスパール・ルネ・グレゴリイ」に捧げる一文の、併せて三つの文章を寄せている。<sup>(2)</sup> 卑見によれば、それはいずれも短文ながら、その動機の切実さと文体の引き締まった美しさとにおいて、そしてとりわけ未曾有の大量死を背景に戦間期ヨーロッパ精神史の隠れた主題となった戦死者追悼論に当事者として正面から取り組み、政治を追悼の行為として再構成する政治思想を表現しえた点において、初期ユンガーを代表する作品の一つである、と言ってよい。しかしながらそれにもかかわらず、筆者の知るかぎり、従来のユンガー研究史において同書に収められたこれら三篇の文章がまともに論じられたことはなく、ましてやこれらに即して戦死者追悼論がテーマ化されたことは一度もない。例えば、カール・ハイント・ポラーを嚆矢とする美学的脱政治学的な研究がユンガーの初期作品を論じる際、ユンガーの他の戦争書にはしばしば言及しながら、特定の政治思想を主題とする同書を言わば無視したことは、その審美的な問題設定の当然の帰結であったとも言えようが、他方イデオロギー批判的な研究もまた、ユンガーの戦争書に見られる攻撃的な表現の政治的危険性を非難することに急なあまり、ユンガーの作品群の中で唯一本来的な意味での政治思想を孕みながら比較的地味な印象を与える同書の意義を見過ごしてきたように思われる。総じて従来の研究史においては、大戦の死者をどう追悼すべきかという、初期ユンガーと政治とを結びつけた最大の問題が回避されてきた、と言わなければならない。

---

(1) Ernst Jünger (Hg.), *Die Unvergessenen*, Wilhelm Andermann Verlag, 1928.

(2) これらについては次の拙訳がある。「忘れえぬ人々 まえがき」及び「忘れえぬ人々 あとがき」、エルンスト・ユンガー著・川合全弘編訳『追悼の政治』月曜社、2005年、1～19頁及び21～34頁。「カスパール・ルネ・グレゴリイ」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』第21巻、2005年、123～139頁。

『忘れえぬ人々』に収められた三篇の文章は、その標題が示すように、戦死者が生き残った者によって「忘れえぬ人々」として記憶されるべきである、という思想を表明している。為にする戦死者の英雄視や美化の通俗的言説と異なり、そこにはむしろ、死すべき存在としての人間がこの世で相互に取り結ぶ仮初の関係に安定性と方向性とをもたらず規範的要素としての記憶の意義について、そして死者の記憶を通じて生者を伝統へと繋ぐ政治的共同体の本質について、何か重要な事柄が語られているように思われる。ユンガーのこのような思想の背景には、近代性の集約的表現とも言うべき物量戦の戦場において集中的に遂行された死の凝視が存在する。それは、近代的主体のアポリアの尖鋭な認識を背景として“不滅の死者の発見”<sup>(3)</sup>とも言うべき内心のドラマを生んだのではないか。本稿の目的は、<sup>(4)</sup>

---

(3) これについて、ハイデッガーに依拠した興味深いユンガー論を展開する次の論考を参照されたい。大泉大「血と塹壕——エルンスト・ユンガー『内的体験としての戦闘』における主体について——」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第2分冊、2007年2月、145～155頁。大泉は、『内的体験としての戦闘』におけるユンガーが、自らの戦争体験解釈に際し、「戦闘への意志」を内容とする「血」を人間主体の根源に設定し、それを通じて、物量戦の猛威に圧倒される人間にその主体性を確保しようとした点で、「権力への意志」を基軸とする「主体性の形而上学」を展開したニーチェの「唯一真の後継者」であったことを指摘する。しかしながら大泉によれば、『内的体験としての戦闘』には、他方で、もはや戦争の出来事をコントロールできないばかりか、その「なぶり物」と化してそれに従属せざるをえない人間の主体性喪失の証言もまた散見し、その意味で同書は「第一次大戦を近代の分岐点として提示」するテキストであり、「主体の変容が記録されている」ドキュメントである。

(4) 自らの戦争体験を記録したユンガーの初期作品は、『忘れえぬ人々』で表明される追悼論以外にも多くの理論的展開の可能性を含んでいた。パウル・ヴェーバーがワイマール共和政末期にナチス運動の批判を意図した一連の線描画で“巨大な共同墓への死の行進”として予言的に描き、第二次大戦後期にホロコーストと民族自滅戦争として顕在化した“死の政治”ないし“集団自決の政治”は、ユンガーの初期作品において“追悼としての政治”と特別の緊張関係に立つ、もう一つの政治観でもある。物量戦における死と死者の発見の経験は、死者をめぐる初期ユンガーの思索において、一方で死者に具現された民族の伝統への静かな沈潜と、他方で大勢の人びとを死へと導いた荒々しい歴史の力への前のめりのファシスト的一体化という、異なる二つの政治的方向性を孕んでいたように思われる。他方その後における作家としての自己確立を念

『忘れえぬ人々』の視点からユンガーの戦争体験記述を振り返り、その本質的契機を析出すること、そしてそれがいかなる解釈過程を通じて追悼を核とする一つの政治思想へとまとめ上げられたかを考察することにある。

本論に先立ち、ユンガーの戦争体験解釈を考察するための概念的な枠組について、ここでウルリヒ・リンゼの整理に基づいて簡単に述べておきたい。そうすることが、イデオロギー批判的な研究に付随しがちな予断や偏見を越えて、ユンガーの戦争体験解釈をより緻密に考察することに役立つ、と思われるからである。リンゼは、第一次大戦の体験の意味解釈に関する研究において、長期にわたる「死との全面的直面」をもたらした大戦が、あらためて「象徴的な不死性」の問題を戦争の社会的な意味解釈の最も切迫した課題へと浮上させたこと、この時代的な要請の中から、一方における「戦死の聖化」と他方における「戦死の脱英雄化」という、——旧来の象徴形式に取って代わる——「死の再象徴化」の二つの新たな形式が現れたことを指摘している。リンゼの念頭にあるのは、前者についてはG・L・モッセが論じたような「戦没兵士崇拜」の形式<sup>(5)</sup>であり、後者については社会において支配的形式と化した前者に抗議してパウル・ヴェーバー、アルフレート・クビーン、ケーテ・コルヴィッツらが「共同墓」や「死の舞踏」という伝統的モチーフを借りつつ展開した様々な芸術的試みである。リンゼは前者を否定し、後者を肯定する立場から、次のように述べている。「社会的に支配的な再象徴化が聖化を通じて死の現実を抑圧したのに対して、それに対抗しつつ展開された“抗議的な”意味解釈は、まさしく大量死の現実を包み隠さず明るみに出そうとした。……共同墓と並んで、死の包括性を表現するための第二の中心的象徴となったものは死の舞踏という伝統的モチーフである。……クビーンの連作『死のある絵』

---

ゝ頭に置くならば、ボーラーが指摘したように、ユンガーの初期作品は、これら過渡期の産物に終わった政治思想の点でよりも、戦慄の中に死者を客体視する審美的意識の形成とその文学的な表現の点で興味深いものとなる。これについては註16、23、25を参照されたい。

(5) George L. Mosse, *Fallen Soldiers. Reshaping the Memory of the World Wars*, Oxford University Press, 1990.

(1915~16年)は、『死の前で万人は等しいという、』——中世以来——『死の舞踏に具象化されてきた観念』を繰り返し表現した。彼はこれによって“城内平和”と“民族共同体”という社会的な平等観に、“共同墓”における共同体という別のヴィジョンを対置した。この共同体は社会的に支配的な象徴論では英雄化されたものの、……クビーンはかかる死の集団化を避け、……死が真に人間的な個性の破壊者たることを暴露した。……“死の舞踏”の特別の重要性は、祝祭としての戦争という支配的な神話に痛烈な風刺が浴びせられる点にある。若きジークフリートの英雄的な犠牲行に代わって、空ろな<sup>さ</sup>れ<sup>こ</sup>う<sup>べ</sup>〔傍点は引用者〕が我々にやりと笑いかけ、骸骨がガチャガチャと音をたてて踊る。死の舞踏の象徴によって、死の脱英雄化がその頂点に達する。抑圧されてきた“死という代父”が、その全ての恐怖を伴いつつ再び現前し、国民的疑似キリスト教的偽装がそれから剥ぎ取られ、人間の被造物的性格が完全に露になる。……それとともに、戦時期の死体性愛傾向（エーリヒ・フロム）が意識の明るみに持ち出され、戦死者崇拜における『生と死の混合』（モッセ）から地盤が取り除かれる。こうして生と生者とへの愛が新たなイメージにおいて表現可能となったのである。<sup>(6)</sup>

第一次大戦における戦争体験の意味解釈問題について、リンゼがこのように「死の再象徴化」にその焦点があったことを指摘するとともに、「死の聖化」と「死の脱英雄化」という、その二つの形式を析出していることは、この問題の歴史的な重要性を理解する上でまことに適切であると思われる。我々も後にリンゼのこの整理を手掛かりにエルンスト・ユンガーの戦争体験解釈を考察することにしたい。しかしながら他方で、リンゼが「死の再象徴化」の二つの形式を真っ向から対立するものとして単純に対置していることは、この問題の政治思想史的意義を考察する上で不適切な

---

(6) Ulrich Linse, “>Saattrüchte sollen nicht vermahlen werden! <Zur Resymbolisierung des Soldatentods”, in: Klaus Vondung (Hg.), *Kriegserlebnis. Der Erste Weltkrieg in der literalischen Gestaltung und symbolischen Deutung der Nationen*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1980, SS. 264ff.

見方であるように思われる。この欠陥は、恐らくはリンゼの論争的な意図に由来しよう。つまりリンゼの所論において「死の聖化」の形式は、もっぱらナチズム台頭の歴史的背景を成すナショナリズムの急進化との関連において否定的に眺められ、戦死の現実の隠蔽に終始する党派政治的なステレオタイプとして概念化されるに止まっている。この論争的視角からは、戦死者の追悼を国民共同体への信頼と関連させて論じる試みが総じて“戦争体験神話”として片付けられてしまうことになる。「死の聖化」の形式がこのように単純化されることは、他方で「死の脱英雄化」の理解にも影響を及ぼす。つまり、その特質が、もっぱら「死の聖化」の否定論という政治的機能に即して理解されるために、近代戦における死の凝視に孕まれる、多様な認識可能性が十分に理解されないままに終わらざるをえない<sup>(7)</sup>。翻って戦死の意味解釈問題に当事者として取り組んだ人々にとって、「死の脱英雄化」の認識と「死の聖化」の希求とは相容れないものでないどころか、相互に深く関連する基本的な戦争経験であったはずである。言い換えれば、物量戦下の戦死の残酷な様相は、人間存在の儚さとその被造物的性格とを露にするとともに、それだけ一層自身と戦死者とが共に属する共同体の不死化への願望を強めたはずである。このような経験には、政治的共同体の本質理解に関わる重要な意義が孕まれていよう。彼らの言説を深く理解するためには、リンゼが言う「死の再象徴化」の二つの形式の相互関係が、より緻密に考察されなければならない。

本稿で考察の対象とするエルンスト・ユンガーの場合、とりわけこのことが強調される必要がある。というのも、ユンガーは、一方で一連の戦争書において大量死の現実とその残酷な様相とを他の誰にも劣らずリアルに

---

(7) ただしリンゼは、註6で挙げたものとは別の論文で、戦争体験者の発言が持ちうる、世界の「不条理性」に関する「真実の証言」としての意義について論じている。Vgl., Ulrich Linse, “Das wahre Zeugnis. Eine psychohistorische Deutung des Ersten Weltkriegs”, in: Klaus Vondung (Hg.), *op. cit.*, SS. 90-114. この論文では、「死の脱英雄化」の言説に対するリンゼの関心が、戦死を英雄化する愛国的言説への反対論という政治的機能ではなく、むしろ死に関する認識の真実性という認識価値に置かれている、と言いうる。

記述しつつ、他方で戦死者追悼論に基づく形而上学的な民族共同体観を唱導することによって、リンゼの対立図式に全く収まらない言説を提示しているからである。すなわちユンガーの戦死論にはリンゼが挙げる「死の再象徴化」の二つの形式が同時に——しかもそれぞれの代表的な事例と目されうる高いレベルにおいて——存在<sup>(8)</sup>する。この同時性は、けっしてユンガーに限られたことでなく、程度の差はあれ、第一次大戦における戦死の意味解釈について前線世代が残した記述に一般的に見られる特徴である、

---

(8)『忘れえぬ人々』を始めとする、ナショナリスト期の追悼論において、ユンガーは、戦死を、より高次の存在としての「秘められたドイツ」に捧げられた犠牲の象徴として解釈する。このような戦争経験解釈法が——リンゼの念頭にあるであろう通俗的な形式に該当するか否かは別として——「死の聖化」の形式に当たることは言うまでもない。

他方、ユンガーの処女作『鋼鉄の嵐の中で』は、当事者による戦争描写が有する迫真性のゆえに、アンドレ・ジードを始めとする同時代の多くの知識人によって高く評価されてきた。ジードは1942年12月1日付けの日記で次のように述べている。「1914年の大戦に関するエルンスト・ユンガーの作品『鋼鉄の嵐の中で』は確かに私がこれまでに読んだ戦争作品の中で最も美しいものである。完全な善意、真実、誠実に満たされている。ヴァノー街で彼の訪問を受ける前に、この作品を……まだ知っていなかったことが後悔される。全然違った話もできたのだが。」新庄嘉章訳『ジッドの日記 V 1940～1950』日本図書センター、2003年、154～155頁。また、戦没兵士崇拜を通じた戦争体験の神話化に関する上掲註5の著名な研究において、モッセは、戦争体験神話の文脈においてユンガーの戦争経験解釈に言及しつつ、ユンガーの言説が有する「誠実さ」を、次のように指摘している。「戦争体験神話は全くの虚構であったわけでない。……ドイツの作家エルンスト・ユンガーのような人々は、戦争の回想において疑いもなく誠実であった。」Mosse, *op. cit.*, pp. 7f. モッセのこの指摘は、リンゼの用語法を借用するならば、ユンガーの「死の聖化」の言説の中に「死の脱英雄化」の形式が存在することを認めるものである、と言えよう。

ちなみにリンゼが「死の脱英雄化」の形式の代表的事例として挙げるパウ・ヴェーバー及びアルフレート・クビーンと、ユンガーとは、「死の舞踏」や「共同墓」のような芸術的モチーフの多くを共有するとともに、実生活の上でも親交を結んだ。クビーンとの交友を軸とした示唆に富むユンガー論を展開する、山本尤氏の次の研究を参照されたい。「エルンスト・ユンガー試論——クビーンとの交友をもとにするひとつの解釈——」、山本尤『近代とドイツ精神』未知谷、2000年、381～407頁。

（9）  
と言ってよい。死の恐怖と戦死の無残さとは、言うまでもなく当事者にとって否定しようもない現実であったのであり、「死の脱英雄化」の認識は、彼らにとって到達すべき目標地点であるどころか、むしろ彼らが否定なしに立たされた出発地点にすぎない。銃後と戦後とに広く流布した型どおりの英雄的兵士像や戦死を作為的に聖化する愛国主義的言説が当の frontline 世代にとってリアリティを欠く空論にすぎなかった一方で、「死の脱英雄化」の言説もまた、現に死の淵に立たされた彼らにとってそれ自体としては何ら救いとも慰めともなりうるものでなかった、<sup>(10)</sup>と言わなければならない。

---

（9）前線世代のナショナリスト知識人の中で、論じるに値するような人々は皆、戦死の実相をけっして隠さなかったばかりか、むしろそれを強制的に表現した。エトガル・ユーリウス・ユングとハンス・ツェラーについて、次の拙稿を参照されたい。川合全弘『再統一ドイツのナショナリズム——西側結合と過去の克服をめぐる——』ミネルヴァ書房、2003年、補論「戦争体験、世代意識、文化革新——ドイツ前線世代についての一考察——」、175～203頁。

（10）リンゼの主張は、「死の脱英雄化」の形式が、「死の聖化」の言説によって抑圧された「生と生者とへの愛」を回復する、という推論に基づくもののように思われるが、生と死の、もしくは市民的な平和主義とナショナリスト的な戦争体験神話との図式的な対置に終始するこのような見方は、戦争体験解釈の理解として単純に過ぎる、と言えよう。というのも、戦場における「死の脱英雄化」とは、「死の聖化」の否定であると同時に、「生の聖化」の否定、すなわち脱英雄化された死がひたすら恐ろしいものとして現れることによって生者の安心感を脅かすことであり、いかなる生も死の残酷さを免れることはないという秘められた真実を日常的に露呈させることでもあるからである。リンゼが「死の脱英雄化」の形式の代表例として挙げるクビーンは、単に「死の聖化」の政治的言説に対する批判者であったばかりでなく、総じて死から目を背ける市民的な文化理解の没落を告知したデカダンスの芸術家でもあった。

ちなみにユンガーの戦争作品には、「死の聖化」及び「死の脱英雄化」の言説と並んで、死も生もともに聖化されがたい物量戦の戦場であらたに見出される「生と生者とへの愛」についての痛切な証言が散見する。例えば、次のような発言を参照されたい。「私がまだ息をしている一日一日が賜物である。上等のワインのようにうっとりしながらゆっくりと味わわなければならない、偉大で神々しく身に余る賜物である。……実際、生は、なんと素晴らしいものに、ひとが今ようやく尊重することを知った喜びに、満ち溢れていることか。このことを、すなわち我々の存在を織り成す小繊維のすべてを生の中に浸し、生の完全な輝きで彩りたいというこの欲求を、我々は戦争に負っている。そのメ



戦間期における戦争体験の意味解釈問題を考える上で重要なことは、「死の再象徴化」の二つの形式をボレミカルに対置することでなく、むしろ後世における政治的な評価を一旦離れ、当事者の言説に即して両者の相互関係を解明することである。換言すれば、後にナショナリスト的な追悼論を展開した人々が、「死の脱英雄化」の極みとも言うべき現実認識からいかにして民族の永生を象徴化する「死の聖化」の言説を導き出したか、その思考の道筋を丹念に辿ることである。というのも、そうすることによってしかこの時代における追悼論の重み、ならびに死者を想起することの今日的な重要性和その困難さを理解することはできない、と思われるからである。脱英雄化の形式であれ、聖化の形式であれ、大量死と直面した人々の言説は、そのような直接的経験を持たぬ者にとって「<sup>(11)</sup>真実の証言」

---

「ために我々は腐敗を知らなければならなかった。というのも、夜を知る者だけが光を知ることができるからである。」 Ernst Jünger, *Der Kampf als inneres Erlebnis*, E. S. Mittler & Sohn, 1922, S. 65. また次も見られたい。「戦争は、ひとが再び全体的なものに、単純でしかも完全無欠な行為に参与しうることを約束した。……とはいえ、運命によって自身が全く容赦なく要求されるのを見る個々人は、それに逆らい、もう一度自分と自分自身の小さな幸せとのために生きたいという願望を時折感じるものである。そのようなときに、ひとは、それまでほとんど気に掛けることもなかった小さな事柄、例えば夕方花咲く庭に静かに佇むことや、平和な町の通りをぼんやりと散策することや、居心地の良い部屋でお気に入りの本を読むことなどを、あらためて評価することを知るのである。」 Ernst Jünger, *Feuer und Blut. Ein kleiner Ausschnitt aus einer großen Schlacht*, Stahlhelm-Vrelag, 1925, S. 17.

小説『シュトゥルム』は、勇敢な前線将校ユンガーの知られざる一面とも言えるようなデカダンな雰囲気、互いの文学談義の中に戦争と文化没落の時代からのひとときの逃避の場を求める若い少尉たちの会話によって表現した作品であり、その中に見られる次の一文は、戦争体験に関する紋切り型の解釈のイデオロギー的視野狭窄を批判して、興味深い。「この戦争は様々な展開を秘めた精神的可能性の原始星雲であった。戦争の影響の中にただ粗野で野蛮なものしか見なかった者は、ただ愛国的で英雄的なものしか見なかった者と同じのイデオロギー的恣意によって、巨大な複合体の中からたった一つの属性だけを取出したにすぎない。」 Ernst Jünger, „Sturm“, in: *Hannoverscher Kurier. Zeitung für Norddeutschland*, Nr. 172, 14. 04. 1923, Beilage.

(11) これは、上掲註7で挙げたリンゼの論文の標題である。

としての重みを持つ。このような関心から、本稿では、まずユンガーの五つの戦争書——『鋼鉄の嵐の中で』(1920年)、<sup>(12)</sup>『内的体験としての戦闘』(1922年)、『シュトゥルム』(1923年)、『火と血』(1925年)、『125号林』(1925年)——において戦死がどのように描かれているかを振り返り、次いで『忘れえぬ人々』(1928年)においてその意味がどのように解釈されることによって一つの政治思想へと媒介されるかを考察する。本稿はあくまでこの課題に関する準備的考察にとどまる。課題の困難さを考慮し、性急な判断を避けるために、過度の概念化や、それに基づくユンガーの所論の論理的な再構成を急ぐよりも、まずはユンガー自身の言葉の正確な引用を重視したい。

## 2 ユンガーの戦争書における戦死の記述

### ① ユンガーにおける「死の脱英雄化」の形式

ユンガーは第一次大戦をどのようなものとして経験し、それをどのように記述したのだろうか。処女作『鋼鉄の嵐の中で』の冒頭の、しばしば引用される有名な文章は、戦争を祝祭的な出来事として捉える——ヴィルヘルムⅡ世期に一般化し、当初ユンガー自身も抱いた——通俗的な戦争観と、それが短期間に打ち碎かれる様子とを、巧みに描き出している。これを一瞥するならば、自らの戦争体験を記述するにあたって、ユンガーが、

---

(12) これらのテキストは幾度も版を重ね、多くの場合、その都度著者による修正を被った。ちなみに最も多くの版を重ねた『鋼鉄の嵐の中で』については、各版の異同の検討を通じてユンガーの思想的変遷を論じた、次の研究がある。Wojciech Kunicki, *Projektionen des Geschichtlichen. Ernst Jüngers Arbeit an den Fassungen von "In Stahlgewittern"*, Peter Lang, 1993. 本稿では、ユンガーによる戦争体験の解釈がどのような思考経路を経て『忘れえぬ人々』における政治思想へと結実するかを問うため、これらのテキストについて、著作集版や全集版など『忘れえぬ人々』以降に改訂された版でなく、全て初版(『シュトゥルム』については新聞に連載された初出の版)を用いた。なお、資料収集に際して京都産業大学図書館の大森わか奈さんにご助力いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

リンゼによって類型化されたような「死の聖化」の通俗的な形式の不可能性を明瞭に認識していたことが分かる。ユンガーは、まずロマンチックな陶醉に浸る若い志願兵たちの戦争当初の高揚した気分について、次のように述べる。「我々は教室、勉強机、作業台を去り、短い訓練期間を経て、1870年以後のドイツ理想主義の担い手とも言うべき、大きな熱狂した集団へと溶け込んだ。物質主義的な時代精神の中で育まれたがゆえに、我々皆の心の中には、異常なものへの、偉大な体験への憧れが鬱積していた。そのとき戦争があたかも陶醉のごとく我々を捕らえたのだ。花吹雪の中を我々は“まさに死なんとする者たち”の酔い痴れた気分で行進した。戦争は我々にきつと偉大なもの、強いもの、祝祭的なものをもたらすにちがいはなかった。戦争は我々の目に男らしい行為、花に彩られ血に濡れた草原における楽しい射撃戦と映じた。世界中でこれ以上に美しい死は存在しない、<sup>(13)</sup>と思われた。」しかしながら、戦前の閉塞した社会・文化状況からの解放を祝祭的な戦争における「美しい死」に託した彼ら“青年運動世代”の当初の期待は、戦場の現実によってたちまち裏切られる。というのも、そこにおける戦争は、「男らしい行為」と「美しい死」を可能にするロマン主義的な別世界ではなく、むしろ人間を破壊の機構に同化し、人間の死を物量の消耗へと還元する、徹頭徹尾近代的な戦争であり、言わば近代性が剥き出しになった世界であったからである。これとの直面が後に近代性についての鋭い認識をこの世代にもたらすことになるが、いずれにせよこの戦争は彼らの想像と懸け離れた様相を呈した。ユンガーによれば、塹壕中に充満した冷たい湿気に起因するリウマチ症状に悩まされつつ、土木作業の合間に掩壕の濡れて腐った藁床で仮眠を取る泥まみれの生活は、英雄的な戦士像よりも、むしろ荒涼とした大地の中で自然に同化して生きる惨めな小動物、すなわちモグラの姿を連想させた。こうしてユンガーは、自らの祝祭的な戦争観が幻想にすぎなかったことを認めて、次のように言わざるをえない。「連隊に短期間だけで、我々は、持参した幻想のほ

---

(13) Ernst Jünger, *In Stahlgewittern. Aus dem Tagebuch eines Stoßtruppführers*, Verlag Robert Meier, 1920, S. 1.

とんど全てを失った。待ち望んだ危険の代わりに、我々が眼前に見出したものは、不潔、労働、眠れぬ夜であり、それらを克服するためには、我々がほとんど持ち合わせぬ類の英雄精神<sup>(14)</sup>を要した。」

ユンガーは4年近くに及ぶこのような戦場生活を、常時携行した——最終的に14冊に上る——ノートに克明に書き記した。本章で論じる彼の五つの戦争作品は、それに基づいて書かれたものである。ユンガーは『鋼鉄の嵐の中で』の序文において、彼が、何故、どのように自らの戦争体験を記そうとしたかについて、次のように説明している。これを見れば、ユンガーが、——リンゼの用語法を借用して言えば——「死の聖化」の通俗的な形式に陥ることを避けるべく、彼なりに大きな努力を払いつつ「死の脱英雄化」<sup>(16)</sup>の形式の可能性を追求しようとしたことが分かる。「私は私の印

---

(14) *Ibid.*, S. 6.

(15) 『鋼鉄の嵐の中で』は、4年間の戦場生活を日付順に記録した文字通りの戦場日記である。『火と血』と『125号林』とは、それぞれ『鋼鉄の嵐の中で』の終わりの特定部分を取り出し、新たに考察を加えるなどしてその内容を膨らませた、日記風のエッセイである。『内的体験としての戦闘』は、トビック毎に戦争経験を論じた独立のエッセイであるが、その素材とされたものは『鋼鉄の嵐の中で』に記述されたユンガー自身の戦争経験である。唯一『シュトゥルム』だけが新聞連載小説の形式を採った創作であるが、その主人公であるシュトゥルム少尉の人物像には、ユンガー自身の自伝的要素が色濃く反映している。ボーラーも指摘するように、同書は、ボードレール、ユイスマンス、バルザック、ラブレールなどへの主人公の傾倒ぶりを描くことを通じて、ユンガー自身の文学的出自を物語っている。Vgl., Karl Heinz Bohrer, *Die Ästhetik des Schreckens. Die pessimistische Romantik und Ernst Jüngers Frühwerk*, Ullstein Materialien, 1983, SS. 128ff.

(16) 克明なメモに基づいて体験の直接的な印象を記そうとしたユンガーの文体が、広い意味におけるリアリズムの特徴を帯びていることは確かである。しかしながら他方で、彼が記述する最大の対象が死であったこと、しかもその際、彼が、「死の聖化」の通俗的な形式をも含め、常人が死の恐怖から逃れるため死に纏わせる一切のヴェールを剥ぎ取って死の顔を直視しようとしたことは、彼の文体に幻想的な質を与える結果をもたらしたように思われる。というのも、ヴェールを剥がれた死は、生者の世界を脅かす、ひたすら不気味で理解不能な姿を呈するからである。この点でユンガーの文体は、リンゼが「死の脱英雄化」の形式の代表的事例として挙げたパウル・ヴェーバー及びアルフ

象をできるかぎりそのままの形で紙に書き写そうと努めた。というのも、私は、印象がいかに急速に消え去ってしまうか、それがわずか数日の間にどれほど別の色合いを帯びてしまうかに気づいたからである。出来事の短い合間や前線の日常業務が終わった後に、そしてローソクの淡い光の下、狭い坑道の階段やテントを張った漏斗抗の中や廃墟の湿った地下室の中で、このメモ帳の山を築くことは、エネルギーを要した。しかしそれはやりがいのあることだった。私は体験の新鮮さを保った。人間は、成し遂げたことを理想化したり、厭わしいこと、ささいなこと、日常的なことを揉み消したりしがちである。そして気づかないうちに自らを『英雄』にしてしまう。私は従軍記者ではないし、英雄コレクションを提示するつもりも

---

▼ レート・クビーンの絵画と酷似する。というのも後二者の絵画もまた、死の幻想的で怪奇的な描写を通じて常人の因習的な死生観を揺るがそうとしたからである。ただし後二者とユンガーとを比べると、後二者が単色の線描画を得意としたのに対し、ユンガーが色彩と音響の多様性とそのコントラストを強調する文体を用いた、という相違が認められる。この点でユンガーの文体は、同様に戦死の無残さを描いた同時代の画家の中でも、むしろオットー・ディクスの多色の戦争画と似ているように思われる。

ちなみにカール・ハインツ・ボーラーは、ユンガーの戦争書における脱英雄化された死の描写を、単に結果として幻想性をもたらすにすぎない写実的観察の所産と見るのではなく、むしろ恐怖の凝視を自律的な美的行為として意欲する「審美的に作用する意識」の所産と目するとともに、かかる意識に基づく戦争経験描写の文学的な様式化にユンガーの戦争書の最大の意義を見出している。Vgl., Bohrer, *op. cit.*, SS. 87ff. ボーラーに倣って言えば、リアリズムではなく、むしろ戦争によって極度に刺激された——そしてデカダンスの文学に範を求めた——この審美的意識こそが、「死の聖化」の通俗的な形式からの脱却と「死の脱英雄化」の高度な形式の実現との、認識論的前提であった、ということになろう。ボーラーのこうした見解は、戦争経験描写の「真正さ」の問題が、誠実さや正直さという道徳的な問題である以上に、「突然の瞬間」に注がれる美的意識の集中度とその様式化された表現という認識論的詩論の問題であることを指摘して、興味深い。とはいえ、本稿の関心が、追悼としての政治観に対応するユンガーの基本的な戦争経験とは何かを問うことにある以上、ユンガーの戦争書の文体が素朴な写実主義に属するのか、それともボーラーが指摘するように様式的にいつそう洗練されたヨーロッパ審美主義の文脈に属するのかということは、さしあたり二次的な問題にとどまる。むしろ重要なことは、戦争経験描写を通じてユンガーが把握した死の真相とは何か、ということである。

ない。私が記述しようと思うことは、どうあるべきであったかではなく、  
どうあったか、<sup>(17)</sup>ということである。」

この発言は、無自覚のまま行なわれがちな粉飾や隠蔽を排して極力事実  
に忠実な記述を行なおうとする、ユンガー自身の意図を述べたものであ  
る。しかしながら、物量戦という極限的な状況において、しかも戦死とい  
う非日常的な出来事を対象として行なわれる記述の真正さという問題を考  
察するためには、著者の意図を考慮するだけでは十分でないように思われ  
る。ユンガーが見た戦死の真相とは何であったのかを問う前に、ここ  
では、ユンガーにそれを見ることがいかにして可能となったのか、言い換え  
れば、ユンガーにおける「死の脱英雄化」の形式の特殊な伝記的条件とも  
言うべきものが何であるかを、少々整理してみたい。

まず指摘されるべきことは、戦争におけるユンガーの立場が、銃後の作  
家や政治家のそれとも、最前線から離れて大軍を指揮する軍司令部のそれ  
とも異なり、終始戦闘現場を指揮する、若い下級将校のそれであった、とい  
うことである。<sup>(18)</sup>このことは、ユンガーの戦争経験に対して次の二つの効  
果、すなわち、戦争の目的や政策や戦略を問う大局的な——戦闘現場から  
見れば外在的な——視点に対する無関心と、戦争を直接自らの五体による<sup>(19)</sup>

---

(17) Jünger, *In Stahlgewittern*, Vorwort, SS. VII f.

(18) 『鋼鉄の嵐の中で』初版には、このことを強調するために「ある突撃隊長の  
日記から」という副題が付されている。ユンガーは、ハノーバー第73歩兵連隊  
に所属する少尉として、西部戦線の各激戦地で小隊や中隊や特別編成の突撃隊  
を率いた。

(19) 例えば、ユンガーが斥候中にヘルメットを脱いだという、次のエピソードに  
は、軍事＝外交政策的な関心に対する戦闘現場の人間の冷ややかな視線が見て  
取れよう。「そして我々二人はヘルメットを脱いだ。というのも、わが国の工  
業がそれを灰色に塗りはしたものの、それから光沢を取り去るための薬剤をま  
だ発明していなかったからである。これでは日光を受けて光るために、遠くか  
らでも見つけられてしまう。このような薬剤を発明することは、例えば我々が  
なぜベルギーに侵攻しなければならなかったかということの理由  
を発明するよりも、ずっと功績が大きいだろうと思う。」Ernst Jünger, *Das  
Wäldchen 125. Eine Chronik aus den Grabenkämpfen 1918*, E. S. Mittler & Sohn,  
1925, SS. 103f.

戦闘として担う個々人の運命に対する関心とをもたらしただように思われる。<sup>(20)</sup>

次に挙げられうることは、ユンガーが軍人として極めて優秀かつ主体的であったことである。<sup>(21)</sup> 機構の歯車ならぬ生身の人間が前線で軍人たるためには、物量戦の恐怖に耐えて戦闘姿勢を持続すること、“持ち堪える

---

(20) 大局的に見れば国家＝軍事機構の一部として目的＝手段関係に即して機械論的に把握されうる軍隊も、戦闘現場では相見知ったわずかの数の人間からなる戦友共同体である。この二つの視点の相違について、ユンガーは、彼が戦況報告のために赴いた旅団司令部と自らが率いた中隊との立場の対比を通じて、次のように述べている。「もちろんここ旅団では、数百名の兵士にとって自らの運命となったこの小さな十字路は、ある数字体系の中の一つの数字以上のものでない。……ここでは、非常に異なっているにもかかわらず同一の枠組を満たす二つの領域、すなわち運命と因果関係とが不思議な仕方では衝突している。ここで私が『我々はあの通りに到達しました』と述べる事実は、あの前線では『我々は連中を殺した』ということの意味する。あそこで存在か非在か、我か汝かを賭け、熱い血によって成し遂げられたことが、ここでは結果と原因の問題設定に置き換えられる。……通りに到達したということは、より大きな戦術行動の基礎となる一つの戦術的成果が達成されたということの意味する。その際、百人が戦死したということは、あの部隊の戦闘力が、計算式に入れうる一定の損失を被った、ということの意味する。そしてこのようにして、どんな個物も、全体、すなわち戦闘の有機の本質から取り出され、そして全ての個物がある新しい考え抜かれた本質へと、すなわち戦闘の精神的構造物へと纏め上げられる。これら二つの全体は、二つの合同の図形のようにびったりと重なり合うが、しかし根本的に異なる内容によって満たされている。一方においては全てが数量的に表現され、もう一方においては全てが計算不能である。」Jünger, *Feuer und Blut*, SS. 188f. ユンガーの初期作品——とりわけ『鋼鉄の嵐の中で』、『火と血』、『125号林』——には、実在の人物と思しき多数の人々が実名もしくはイニシャルで登場し、その生死の印象的な有様が描かれている。『総動員』（1930年）や『労働者』（1932年）などの、戦争や国家の理論的考察を展開する後の著作と対照的に、そこでは個々人の運命に対する関心が顕著である。『忘れえぬ人々』はこのような関心の所産であり、その集約的な表現である。

(21) ユンガーの軍歴を特徴づける顕著な事実は、七度の重傷を経てなお戦場に留まり続けたその軍人としての徹底した主体性である。ユンガーが数々の勲章を受けるほどの向こう見ずな戦いぶりを示し、なおかつ大戦を生き延びたことには、彼の優秀さばかりでなく、並外れた強運が関与しているように思われるが、いずれにせよ、ユンガーが戦争のほぼ最初から最後まで戦場にあったことは、大戦のあらゆる局面——とりわけ長期に及んだ塹壕戦と1918年3月の大攻勢に現れた後期物量戦——を身をもって経験する機会と戦争体験の生き証人としての資格とを彼に与えた。

(durchhalten)”ことが最も切実な必要事であったことは、想像に難くない。<sup>(22)</sup> ユンガーの軍歴は、彼が、美的、政治的な主体性を追求する以前に、<sup>(23)</sup> 戦場でこのような軍人としての主体性を貫こうとし続けた人物であった、

---

(22) これを物語るユンガーの次の発言を見られたい。「〔野戦病院の〕広い手術ホールには、戦争の悲惨さの全てが集まっていた。一連の手術台では医師たちが血まみれの手仕事を取り仕切っていた。こちらでは腕や脚が切断され、あちらでは頭蓋骨に穴が開けられ、皮膚に固く癒着した包帯が剥される。呻き声と苦痛の叫びとが非情な光に照らされた空間中に響き渡り、手術器具や包帯材料を持った白衣の看護婦たちが慌しく台から台へと急ぐ。この光景を見た後に再びかつての元気で戦火の中に赴く兵士は、神経の試練に耐え抜いた、と言いうる。というのも、ここでの新しく恐ろしい印象は、ことごとく頭脳にしっかりと食い込み、〔後に戦場で、〕鉄塊の接近と着弾とのわずかの時間にますます恐ろしく膨れ上がってひとを麻痺させる観念連合に、あらたに付け加わるからである。」Jünger, *In Stahlgewittern*, S. 64.

(23) 戦後、ユンガーは文学研究に集中的に取り組む一方で、復員軍人を母胎とする急進ナショナリストのかつセクト的な政治運動にも深く関与した。文学と政治の両面において進められた、ユンガーのこのような自己形成努力の成果が、彼の戦争書に盛り込まれていることは言うまでもない。ボーラーは、ユンガーの戦争書に現れた審美的知覚の鋭さという文学的特質を評価する立場から、彼の戦争書に関する、政治イデオロギーの表明としての解釈及び戦争体験のドキュメントとしての解釈を批判して、次のように述べている。「ユンガーの戦争書には知的水準の大きな落差が認められる。……最も大きな理論的関心を含んでいるのは『125号林』である。他方『鋼鉄の嵐の中で』、『内的体験としての戦闘』、『火と血』には……後の修正とイデオロギーの変形の過程がまだ生じていないために、それらは……一定の真正さという利点を有している。とはいえ、それらをドキュメントとして読もうとするなら、それもまた誤解であろう。むしろそれらは、予め形成されている思考模範に依拠しつつ進められた、高度の文学的な様式化の所産なのであり、それによって初めて『[戦争の]恐怖』を浮彫にすることが可能となったのである。……あらゆる陣営の戦争ナショナリズムに共通し、ユンガーの作品にも自明の添え物として付き纏う常套文句を度外視するならば、彼のパースペクティヴに独自なことは、戦争が審美的知覚の途方もない成長の場として熟考されている、ということである。」Bohrer, *op. cit.*, SS. 109f. ユンガーの戦争書に「審美的に媒介され、審美的模範に従って構造化された現実経験の問題」を見て取ろうとするボーラーの視角からは、現実経験のイデオロギー的脚色は無論のこと、そもそもその「事実的側面」自体が問題にならない。極論すれば、ユンガーの戦争書は、それがあつきたりのドキュメンタリーでなく、むしろまさに高度な文学的創作であるからこそ、優れた現実経験としての価値を有しているのである。Vgl., *ibid.*, 7



ということを物語っている。ユンガーの戦争書は、まずはこの事実と関連付けて読まれる必要がある。<sup>(24)</sup>

そして最後に、やはり見過ごされるべきでないことは、ユンガーが戦争体験を文章に表現できるだけの文学的な素養と関心を予め有していたこと、そして戦後もそのための文学的な研鑽を持続したこと、これである。<sup>(25)</sup> 本稿の問題関心にとって重要であるのは、このことが、初期ユンガーに

---

↘ S. 91. ただし ボーラーのこのような言明は、あくまで審美的な問題への視点の自覚的な限定の姿勢として受け止められるべきであり、ユンガーの戦争書解読にとって伝記的事実が有する意義を総じて否定する主張と見られるべきでない、と思われる。Vgl., *ibid.*, S. 9.

- (24) ユンガーが戦争書の中で戦争の意味解釈や塹壕戦兵士の肖像について様々に述べる印象的な言葉——例えば、「[我々にとって] 本質的なことは何のために戦うかでなく、いかに戦うかである」(Jünger, *Der Kampf als inneres Erlebnis*, S. 76) というような文や、「死の軽業師、爆薬と炎のマイスター、華麗な肉食獣」(*ibid.*, S. 32) というような表現——は、従来しばしば、“決断主義”や反文明的な“プリミティビズム”といった、体系性を有する特定の世界観の表明と解されてきた。しかしながらそれらの言葉が置かれた文脈——極限的な状況の中で軍人として“持ち堪える”ための心理的な支えの模索、戦闘前夜の酒と興奮とによる陶酔の心理、激戦後の最初の休日に生き残った者たちが死んだ戦友に捧げるデスペラートな歓談とワイン (Trankopfer) など——に留意するならば、それらはむしろ、さしあたり歴戦の軍人間における「戦争の適切な慣行」(Jünger, *In Stahlgewittern*, S. 79) を述べた言葉として受け止められるべきであろう。これらの片言隻句を捕らえてそこからユンガーの世界観を読み取ろうとする性急な試みが、従来かえってユンガーの政治思想における追悼論の意義を見過ごすことにつながったのではないだろうか。

- (25) この点はボーラーが最も強調するところである。しかし当然ながらボーラーの力点は、追悼論との結びつきを強調する本稿と異なり、戦死の記述に際するユンガーの文学的力量的の高さという点に置かれている。同じように戦争体験を文学的に表現した E・M・レマルク及び L・レンとユンガーとを比較しつつ、ボーラーは、前二者と後者のイデオロギー的政治的傾向の相違でなく、むしろその文学的レベルの相違について、次のように興味深い指摘を行なっている。「エーリヒ・マリーア・レマルクの『西部戦線異状なし』(1928年)とルートヴィヒ・レンの『戦争』(1929年)とは、……前線における大量死についての言明と報告を含み、その中で、人間の肉体を歪め、感覚的アイデンティティを破壊するこの死の特質についても、簡単に言及している。これら二冊の書には、“不安”、“恐怖”、“戦慄”という本書の関心にとって中心的な領域が

あって、戦死者の姿を国民の記憶に留める必要の自覚と結びついていたことである。戦争の国民的記憶の必要とそれに関する芸術の役割とについて、ユンガーはこう述べている。「ニーベルングンの歌におけるように、例えばソムム戦にも形態を与えられないだろうか。……我々戦士もこの戦争を通じてようやくドイツとは何かをあらためて知ったように、芸術は再びドイツ的にならなければならない。世界中の他のどんな理念に対してよりもはるかに多くの犠牲がドイツのために払われるのを我々は見てきた。国民的なものの中のみ我々の再生はある。……あらゆる領域において必ず生じるであろう精神的深化は、芸術においても現れるにちがいない。炎の中から帰還する民族の一部分——疑いもなく最も価値ある部分——が昨日の形式にもはやいかなる感覚も持たないであろうという理由からして、問題設定は変化せざるをえない。時代のおぞましい面は忘れられようが、偉大な献身というその本質的な面はけっして消え去らないだろう。」<sup>(26)</sup>

---

ゝ姿を現している。しかしながら両書が異常なもの、すなわち絶対的な破壊としての死について記述する際、ユンガーの記述と異なるのは、両書がこの事態を実際にテーマ化することを断念している、ということである。把握できないものは、ユンガーにおけるようにメタフォーリッシュに『現われる』ことがないために、把握できるものの文脈の中にとどまってしまう。日常をプラグマティックに認識する心理学が、レマルクに、絶対的な恐怖を他から切り離して認識しうる単位として知覚することを禁じている。彼は小説の主人公にこう語らせる。『でもこれらの事柄を言葉にすることは、僕にとって危険なことなんだ。そうすればそれらが巨大になり、もう克服できなくなるかもしれない、という不安を僕は感じているんだ。』……ユンガーのファンタジーは、自らの頭脳の抵抗を押し切って恐怖イメージに身を委ねる。他方レマルクはこう言う。『あっさりと首をすくめている限り、恐怖は耐えられる。でもそれについて熟考すれば、それは破壊的な力を振るうんだ。』……ユンガーの『恐怖』のメタフォーリック、すなわち近代戦の心理的、認識的に決定的なこの要素の集中的な展開が、上述の理由からレマルクにもレンにも欠けている次元の把握を可能にするのである。」 Bohrer, *op. cit.*, SS. 144ff.

- (26) Jünger, *Das Wäldchen* 125, S. 190. この文章は『125号林』からの引用である。追悼論がドイツ・ナショナリズム思想と結びつくのは、『125号林』を含め、ユンガーのナショナリスト期にあたる1920年代後半の作品に限られる。しか

## ② ユンガーによる戦死の記述

追悼論との関連においてユンガーによる戦死の記述を俯瞰してみるならば、それらが大きく次の三つの場面に類別されることが分かる。すなわち、第一に顔と名前を持つ“人物”としての身近な戦友の死についての記述、第二に匿名化した戦死者の描写、第三に戦死の事実が戦友や遺族に及ぼす影響についての考察がそれである。第一の場面では生前の印象的な姿を通じて自ずと皆の記憶に残る死者が描かれ、第二の場面では人格性を破壊され物体と化した、記憶されざる死者が描かれる。物量戦における戦死の特徴的な様相を最も際立たせるのは、この場面である<sup>(27)</sup>。第三の場面では身近な者の戦死を前にした人間の恐怖と苦悩への論及が見られる。以下で

---

ゝしながら追悼のモチーフがユンガーの終生を貫くものであったことは、ナショナリスト期よりも前の作品である『鋼鉄の嵐の中で』初版（1920年）の序文にある次の文章を見れば、一目瞭然である。「〔戦死者に対して〕どんな感謝も十分ではありえない。一つのイメージを述べよう。アルプスの最高峰に彫られた、重い鉄兜を被る顔。それは、静かに、そして真剣にこの大地を見下ろし、自由な海へと流れるドイツのライン川を見下ろす。いつかその日が訪れよう。」Jünger, *In Stahlgewittern*, Vorwort, S. VII. ちなみに『鋼鉄の嵐の中で』の初版の冒頭には「戦死した我が戦友の思い出のために」という一種の献辞が記され、またユンガーが1930年代に自らのドイツ・ナショナリズム思想を清算した後に出版された、その著作集版（1961年）と全集版（1978年）でも、冒頭に「戦死者のために」という言葉が記されている。

- (27) ボーラーが最も重視するのもこの第二の場面である。しかしボーラーがそうするのは、そこにおいて総じて「死の聖化」の形式が不可能となることによって、近代戦の恐怖に対する審美的知覚の可能性が拓かれるからである。ボーラーはこう述べている。「戦争の政治的解釈がもはや不可能となるとき、戦争は恐ろしく、理解不可能な『現象』となる。……ルカーチは、表現主義者たちが、正しい党派性を持たなかったために、『帝国主義戦争に反対せず、戦争一般に反対した』として、彼らを批判したが、彼が見落としたことは、この政治的欠陥こそが表現主義者をして『恐怖』の出来事に対する前イデオロギー的な感受性を獲得せしめた、ということである。20世紀の大量殺戮がイデオロギー的に論評されてきたことが、観察する意識のこのような感受性を大きく損なってきた。クルト・マウツは、このような『カオス的な』戦争経験がすでにニーチェの著作、とりわけ『ツァラトゥストラ』に示されていることを正しく指摘した。ニーチェの普仏戦争経験は、1914年の恐怖の先取りされた基本モデルのように読みうるがゆえに、一世代全体の思考を深く規定した。ユンガーは

は、ユンガーの戦争書からの引用を通じてこれら三つの場面を順次見ていくことにしたい。

### 〈第一の場面〉

まず、伝統的な愛国的追悼論ともまだ調和しうるように思われる第一の場面について、四つの例を挙げよう。

1) 中隊長ユンガーは右胸に貫通銃創を負って倒れた。敵の包囲攻撃の中、彼を背負って逃げようとして被弾したヘンクストマン一等兵について、ユンガーは次のように記している。

私は、テント地に包まれたまま、ひとり地面に取り残され、止めの一発を待った。しかし私の中隊の兵士が一人でも生き残っていた限り、私は完全に見放されていなかった。私の傍らでヘンクストマン一等兵の声をした。「私が少尉殿を背負うか、我々二人で切り抜けるか、あるいは共にここにとどまるか、しましょう。」……私が忠実な部下の首に腕を巻きつけ、その背中に負ぶさったとき、かすかな金属音が響いた。ヘンクストマンは全く静かに私の下でくずおれた。私は、私の大腿にまだしっかりと巻きつけられている彼の腕をほどいた。一発の銃弾が彼のヘルメットとこめかみを射抜いていた。自らの隊長に対する忠誠を死によって確証したこの勇者は、ハノーバー近郊のレター出身で、教師の息子だった。私は後日彼の家族を訪問した。彼のことは永久に忘れられない。<sup>(28)</sup>

---

ㄨ この思考に対して、最も鋭い、アタヴィスティックであると同時に最も近代的形式を与えたのである。」Bohrer, *op. cit.*, SS. 104f. ボーラーのこの指摘は、本稿の問題関心にとっても、ユンガーの戦争体験記述の「真正さ」の証言として重要である。しかし他方で、ユンガーの戦争体験記述のもっぱら美学的な側面を重視するボーラーの主張が、その政治的側面を軽視しがちな点には注意が必要である。ボーラーの主張によって、ユンガーの戦争体験記述と国民的追悼論との繋がりが否定されうるわけでもなければ、総じて無残な戦死を国民的に追悼する意義そのものが否認されうるわけでもないからである。

(28) Jünger, *In Stahlgewittern*, S. 180.

これは、ユンガーにとって自らの生が戦友の死によって贖われた最も直接的で典型的な事例である。本稿冒頭に掲げた『忘れえぬ人々』まえがきの一文に示される、「戦死者から受けた忘れがたい恩義」という観念の背景にあるのは、このような経験<sup>(29)</sup>であろう。

2) ユンガーは両脚に被弾して野戦病院に収容された。隣のベッドで息を引き取った、ある軍曹の印象深い姿について、ユンガーはこう記す。

私の隣のベッドに片脚を失った軍曹が死の床に就いていた。最期を迎えたとき、彼は高热に因る意識混濁から覚め、看護婦に聖書の中のお気に入りの一節を読んでもらった。それから、彼はほとんど聞き取れないほどの声で同室の患者たち全員に対して、自分が熱によるうわごとで皆の安眠を妨げたかもしれぬことを許してほしいと頼んだ上、我々を元気づけるために我々の伝令兵の可笑しい方言を真似ようとして、その数分<sup>(30)</sup>後に亡くなった。

これはドイツ的な敬虔さの事例と言えよう。このような経験が、『忘れえぬ人々』において戦死者の共同性をめぐってユンガーが展開するドイツ人の「性格の共同体」<sup>(31)</sup>という観念の基礎を成しているように思われる。

---

(29) この事例以外にも、ユンガーは、間一髪のところ自身が生き残る一方、戦友が言わば自らの身代わりのような形で死ぬという経験を数多く重ねた。小さな偶然が人々の生と死を分かったとも言うが、ユンガーはそれらの経験を個人的な運不運に帰さず、共同の事業を担った死者によって自身に任務が委託されたことの印として受けとめようとした。たまたま戦闘前夜にユンガーが被弾して入院したため生き残り、他方彼が率いた小隊が翌日の戦闘で全滅した事例について、ユンガーは次のように記している。「私は、戦闘の前夜に私を確実な死から奇跡のごとく免れさせた偶然の命中弾を喜びもしたものの、他方で、少なからぬ人々には奇異に聞こえるかもしれないが、戦友と運命を共にし、彼らと同様私の上にも戦争の鉄のサイコロを転がせたかった。私がこの後さらに体験することになる血まみれの戦いの頂点では、これらの戦士たちの輝かしい不朽の栄光が、絶えず私に対して、かつての戦友愛に値することを示せ、と告げるのである。」*Ibid.*, S. 59.

(30) *Ibid.*, S. 64.

(31) 前掲拙訳『追悼の政治』、16頁。

3) 大きな漏斗孔に待機するユンガーの中隊に一発の榴弾が命中し、中隊はほぼ全滅する。生き残ったわずかの兵士を引き連れて夜の塹壕を逃げ惑う途次、ユンガーは、重い弾薬箱を引き摺って付いてきた、ある新兵の傷ましくも健気な姿に気づく。彼はこの情景についてこう記している。

半時間前には強力で優秀な中隊を率いていたはずなのに、いまや私は、完全に意気阻喪した若干の兵士たちと塹壕の混乱の中を彷徨っていた。数日前の演習の際に弾薬箱の重さに耐えかねて泣いたために同僚から馬鹿にされていた、まだ子供のような顔つきをした若い兵士が、いま、恐ろしい場面から自ら救い出したこの荷物を、この困難な逃避行の間中ずっとと忠実に引き摺っていた。これを見たとき、私は打ちのめされた。私は地面に身を投げ出し、身悶えして咽び泣いた。<sup>(32)</sup>

この事例は『鋼鉄の嵐の中で』においてだけでなく、『火と血』や『冒険心』<sup>(33)</sup>でも言及されており、ユンガーにとって「人間の無条件に気高い態度」<sup>(34)</sup>、「高貴さの理念」の象徴となった。

4) ユンガーは最前線からの帰途、旧知の戦友二人を乗せた担架と出遭った。その折の辛い経験を、彼はこう記している。

私はカルベの救護所のすぐ手前で、重傷を負った二人の旧知の将校を

---

(32) Jünger, *In Stahlgewittern*, S. 141. この引用文ではこの若い兵士の生死は不明であるが、『冒険心』での記述を見ると、この後すぐに亡くなったようである。後掲註34を参照されたい。

(33) Jünger, *Feuer und Blut*. S. 86.

(34) ユンガーはこう述べている。「私にとって高貴さの理念は、大戦時の若い兵士たち、学校袍を武器に替え、姿が見えなくなるほど高く荷を詰め込んだ背囊を背にしたあの兵士たちの一人に具現されている。この気高い若者が、激しい雨と炎に見舞われた夜に、彼にはあまりにも重過ぎる大きな弾薬箱を二つ、死ぬ直前まで無言で健気に引き摺っていた姿は、私の心に残る実り豊かなイメージの一つとなっている。」 Ernst Jünger, *Das abenteuerliche Herz. Aufzeichnungen bei Tag und Nacht*, Frundsberg-Verlag, 1929, S. 260.

乗せた担架と出遭った。一人はツェルン少尉だった。我々はつい二晩前に彼のために楽しい宴会を催したばかりだった。いま彼は、半ば服を脱がされ、戸板の上に寝かされていた。私が近寄って彼の手を握ったとき、彼は、死の確かな兆候であるロウ色の顔をし、ぼんやりとした目つきで私を見詰めた。もう一人のハーバーカンフ少尉は脚と腕の骨を榴弾片によって粉々に碎かれ、切断手術が避けられない様子だった。彼は死人のように青ざめた顔色をし、心底諦めた表情で担架に横たわってタバコを吸っていた。……私は今日戦時中の少尉について大衆の否定的な評判を耳にするたびに、これらの男たちを思い浮かべざるをえない。彼らは義務と名誉という旧プロイセン的精神を……血と泥の中でまさしく苛酷な最期に至るまで担ったのだ。<sup>(35)</sup>

この文章は、ユンガーの追悼論の同時代史的背景の一つ——敗戦によって歴史の連続性を断たれたドイツにおける、戦争と軍人への否定的な評価——を物語るものである。これに対する反発が、恐らくはユンガーの追悼論においてもその直接的な動機の一つを成していた。

## 〈第二の場面〉

さて次に、匿名の戦死者を描写した第二の場面について、それをさらに次の四つの局面——1) 人間の物量化、2) 人間の動物化、3) 人間の物体化、4) 人間の世界からの消滅——に分かって見てみたい。

1) 物量戦は人間に潜在的な死とも言うべき戦争機構への同化をもたらす。まだ負傷が癒えないために監視将校の任務を宛がわれたユンガーは、監視所から見た——人間が物量の一環としてその中に機能的に組み込まれる——現代の戦場の光景をこう記した。

現代の戦場は、無数の目、耳、腕がある重要な一瞬をじっと待ち構え

---

(35) Jünger, *In Stahlgewittern*, S. 124.

て潜む、巨大で静かな機構に似ている。そしてたった一発の赤い信号弾が炎の序曲としてどこかの穴から上空に打ち上げられるや、幾千もの砲が同時に火を噴き、破壊の工場が一挙に無数の動力によって稼働されつつ、その粉碎の工程を開始する。密に編まれたネットを通じて命令が火花と電気信号として飛び、前方では破壊に拍車をかけ、後方からは規則正しく新しい人員と新しい物量とを動員し、炎の中に投入する。誰もが遠くから渦に巻き込まれるようにして謎めいた意志によって捕らえられ、容赦ない精確さで凄まじい出来事の焦点へと駆り立てられるのを感じる。<sup>(36)</sup>

2) 死に先立つ恐怖は人間を動物に変える。<sup>(37)</sup> 次の記述は、上記の第一の場面の3) と同一の事例を対象とし、被弾直後の漏斗孔の様子を描いたものである。突然の恐怖の出来事が、勇敢な軍人集団を、言葉を失って喚きのたうつ動物の群れに変貌させてしまう様子を、ユンガーは漏斗孔の上部にある窪みから目撃した。

そのときバルコニー状の窪みから私がむごたらしい闘技場のごとき漏斗孔の中に見たものは、氷のナイフさながら私の心を貫き、悪夢の中の恐ろしい現象のように一撃で私を絶望させ金縛りにした。この榴弾の背には死が座っており、それが生の充溢の只中に飛び込んだのだ。爆発はひょっとしたら1秒前に起こったのかもしれないが、下方で生じた出来事の映像は、マグネシウム光で焼き付けられた写真のように私の脳裡に焼き付けられた。漏斗孔の中は噴火口さながら厚く白い雲が充満している。影のような人々の群れが険しい壁をよじ登っており、私は上から深く屈み込みながら暗闇の中の隅々まで目を凝らして彼らを見た。魔法のような照明、刺すような赤い光が孔の底で輝く。それは、機関銃弾の細

---

(36) Jünger, *In Stahlgewittern*, S. 65.

(37) 戦場における文明と荒廃の対照も、この記述のヴァリエーションの一つである。Vgl., Jünger, *Der Kampf als inneres Erlebnis*, S. 17.



長い発射光が、弾薬盒から吹き出る照明弾の炎と混ざったものである。しかしこれは何だろう、下方の赤みがあった灼熱の中で、脱出しようとするものの何か悪魔的な力で地面に結び付けられているかのように、様々にそして鈍重にのたうつものは何だろうか。沸騰する湖の中で身を振る両生類のような、もしくはダンテのヴィジョンにおける呪われた者たちのような、この肉体の混乱。心はこの映像を払いのけたいと思うが、にもかかわらず、その恐怖の全体とともにそれを受け入れてしまう。それは重傷者たちである。今、この2秒間の永遠が過ぎた後の今、ようやく彼らは何が起こったかを理解し始めたように見える。多声の恐ろしい叫びが発せられる。かすれた声、甲高い声、長く引く声、短い声、たった一つの恐怖から百様の叫びが上がる。言葉は一つもなく、ただ音声だけだ。しかしそれは、あらゆる言葉に先立つ音声であり、野獣のように直接心をわしづかみにする。<sup>(38)</sup>

3) 死は人間を物体に変える。それは人間の身体を、ア) もはや人間とは言えない奇怪な形状へと歪め、イ) 悪臭を放つ腐敗物に変え、ウ) ついには生と死を融合させつつ循環する大自然へと還元する。ア) は独軍が占領した仏軍陣地に散らばる仏兵の死体の描写であり、イ) は特定された状況の説明でなく、恐怖のモチーフを死と腐敗の結びつきによって説明するくだりであり、ウ) はイ) と同様に特定された状況の説明でなく、生きた兵士と戦死者とをともに自身の中に同化する塹壕の永遠性のイメージを述べるくだりである。この順に、ユンガーの文章を三つ引用する。

ア) 私は塹壕から朝靄の中へと跳び出し、一人の仏兵の収縮した死体の前に立った。破れた軍服の隙間から魚のような腐った肉が緑白色状に見える。ぐるっと振り返った途端、私は驚愕のあまり後ずさりした。すぐ傍の木の根元に、うずくまった人影があったのだ。空洞の眼窩と茶褐

---

(38) Jünger, *Feuer und Blut*. SS. 80f.

色の頭骸骨に残る数束の髪とは、私の眼前にいる者が生者でないことを示していた。周囲にはさらに10人あまりの死体が横たわり、腐敗し石灰化してミイラのように干からび、不気味な死の舞踏へと硬直していた。……地下壕は、まるで略奪を受けた古道具屋のような様相を呈していた。〔散乱する様々な物の〕間に勇敢な防御兵たちの死体が転がっており、彼らの銃はまだ銃眼に差し込まれたままであった。砲撃で破壊された木組みからは、そこに挟まった胴体が突き出ている。頭と首は落ち、赤黒い肉の間から白い軟骨が見える。私には理解することが困難になった。その傍に、非常に若い兵士が仰向けに倒れ、虚ろな眼をして、拳は何かを掴もうとするかのような形に硬直していた。このような死者の、何かを問いたげな眼を見ることは、不思議な気持ちだ。この戦慄を、私は戦争中<sup>(39)</sup>けっして失わなかった。

イ) 腐敗。少なからぬ者が、十字架も盛り土もなく、雨と日光と風に晒されて消え失せた。孤独な死体の回りには、ハエが分厚い雲のように群がり、むっとする空気が漂った。隠しようもないのは腐敗する人間の臭いであり、濃厚で甘ったるい嫌な臭いが粘り気のある粥のように纏わりつく。大きな戦闘の後にはこの臭いが長く戦場を覆ったので、空腹の者すら食事を忘れた。……死の全ての秘密は、その前ではどれほどはしゃいだ夢でも褪めてしまうような、残酷さにあることが暴露された。髪は、秋の木の枯葉のように、頭蓋骨から束になって抜けた。少なからぬ死体は緑がかった魚肉のようになり、夜には破れた軍服の間から光を放った。それを踏んだ靴は、燐光の足跡を残した。石灰化し、徐々に崩れていくミイラのように干からびた死体もあった。別の死体からは、肉が骨から剥がれて赤褐色のゼラチンのように流れ出した。蒸し暑い夜、膨張したガスが傷口からシューと漏れ出るときには、あたかも膨らんだ死体が目覚めて幽霊となったかに思われた。しかし最も恐ろしいものは、

---

(39) Jünger, *In Stahlgewittern*, SS. 13f.

ますます無数の蛆虫の塊と化す傷口から湧き出る、泡立つような蠢きで  
<sup>(40)</sup>  
あった。

ウ) アルプスから北海に至るまで、田畑、森、沼、川、山頂を越え、冬も夏も昼も夜も、身を強張らせた兵士たちの鎖が張り渡された。彼らは、風雨と陽光に晒されてぼろぼろになり、ローム土にまみれ、目の奥にいたるまで精彩を失い、周囲の土の一部として塹壕の中に根づいていくように思われた。…〔中略〕…〔戦闘が終わった後の〕塹壕は、痙攣して死んだ者の乱れたベッドのように元の姿に戻った。白い包帯を巻いた精彩のない姿が、再び太陽が昇る奇跡の中、世界と体験したこととの現実性を理解できずに立ち尽くす。中間地帯や漏斗孔や鉄条網の辺りで、負傷者の呻き声が高まっては静まる一様なリズムを繰り返し、やがて徐々に消えていく。再び昼と夜が塹壕の上を流れる。……腐敗が光景を覆う。死者はゆっくりと朽ち、やがて大地と、彼らがその周囲で戦った塹壕と、完全に一体化する。<sup>(41)</sup>

4) 死は、いかなる彼岸の保証もないまま、人間を世界から跡形もなく消滅させる。自らの中隊が英軍の包囲網の中に孤立した際、ユンガーは全滅の予感に戦慄する。その折の心境を彼は次のように記している。

我々は場合によってはまだ2、3日持ち堪えることもできようが、機関銃の冷却水が全て蒸発し、弾薬が尽きれば、我々の塹壕は四方から迫る迫撃砲や火炎放射器によって簡単に片付けられるだろう。こういうことは幾千回も起こったことであり、全く嬉しくない見通しではあるが、それに備えなければならない。以前我々は、包囲攻撃され最後の一人になるまで戦った防御戦の話を読んだとき、それを今と全く違うように想像していた。しかしそれは根本的には常に同一なのである。つまり、そ

---

(40) Jünger, *Der Kampf als inneres Erlebnis*, SS. 14f.

(41) *Ibid.*, S. 23 u. S. 29.

れはあまり輝かしいものではなく、むしろ非常に孤独で全く見捨てられたようにして起こり、誰もそれを問題にせず、死がその旗をこの切り刻まれ掘り返された塹壕の上に突き立てるまでに為された、最後の、そして最高の努力について、ひょっとしたら誰も報告できないかもしれない、そのような戦いなのである。そしてこのような考えは時として氷のように冷たい感情を引き起こす<sup>(42)</sup>。

### 〈第三の場面〉

最後に、戦死の事実が戦友や遺族に及ぼす影響を記述した第三の場面について、それをさらに次の三つの立場—— 1) 戦闘指揮官の立場、2) 個人の立場、3) 遺族の立場——に分かって見てみることにしたい。

1) 戦死の問題に臨むユンガーの立場は、何よりもまず——部隊の士気を維持するために皆の動揺を抑えることを任務とする——戦闘現場の指揮官のそれである。最初の引用文は、砲撃を受けて死亡した兵士の葬送をユンガーが指揮した事例の記述であり、二つ目の引用文は、**第一の場面の3)** 及び**第二の場面の2)** と同一の事例を対象とし、生き残った若干の兵士をユンガーが励まそうとした際の様子を描いたものである。

この不幸の5分後に、私は現場に駆けつけた。これは、火急の場合にしか怠ることが許されない、隊長の最重要の任務の一つである。まずは、資格ある国家の代表者が、永遠に戦闘団体を去る者に別れを告げることが必要である。その後、そのような場の周りには意気消沈と気力喪失の気分が急速に広がる。この気分は、それを自ら体験した者にしか理解できない。というのも、このような光景を目の当たりにした誰しもがそれを自分の身に引き当てて考える、ということは全く人間的なことだからである。……私は重傷者や惨たらしく捻じ曲げられた肉体や死体で埋まった戦場を幾百回、いや幾千回と見てきたが、決してそのような光

---

(42) Jünger, *Das Wäldchen* 125, S. 249.

景に慣れることができなかった。それに耐えるために、私はいつも同じ努力をしなければならない。どのようにして耐えるかは私自身にもあまり定かでないが、概ねこうである。すなわち、近くの対象を明瞭に見たくないので、それを見ているとき、目を遠くにやっている、というような具合である。それは兵士による抽象化であるが、医者による抽象化よりもいっそう難しい。なぜなら、医者はそれを客体として見てよいのに対して、兵士はその中に自らの運命を見てしまうからである。まさしくここに内的な力の決定的な試金石がある。というのも、このような光景は、「神経に障る」ばかりでなく、全く単純な人間においても、そうと自覚されないまま道徳的な性質の疑問をもたらすからである。つまりこのような出来事の意味とそこにあらねばならない罪とについての疑問である。<sup>(43)</sup>

板張り寝台に腰を掛けながら、私は二人の将校とどうでもよい話をして、身を責め苛むような考えから逃れようとした。……無言で掩壕の階段にうづくまる兵士たちを元気づけようとして私がかけた短い言葉は、ほとんど効果がないように思われた。私には、ひとを勇気づける才能も<sup>(44)</sup>なかった。

2) 戦死者に対面する軍人は、その死を悼む戦友共同体の一員であると同時に、その無残な最期を我が身に引き当てて慄く個人でもある。このうちの後者をテーマ化した小説が『シュトゥルム』<sup>(45)</sup>である。ユンガーはその中の一節にこう記している。

---

(43) *Ibid.*, SS. 139f.

(44) Jünger, *In Stahlgewittern*, S. 143.

(45) 上記1) の『125号林』が戦死の問題を「国家の代表者」の立場から論じたのに対して、この小説では、同じ問題が「近代国家による個人の実存の重大な侵害」、「近代国家の奴隷制に対する個々人の抗議」の集中的表現として、国家と個人を対置する理論的枠組みにおいて捉えられている。Vgl., Jünger, „Sturm“, *op. cit.*, Nr. 168, 12. 04. 1923, Beilage.

この戦闘共同体、生死を共にするこの中隊には、根本的に人間の交際の独特の儚さと悲しさが特に明瞭に現われていた。人間の交際は、一群のハエと同様、乱舞したかと思うと、一陣の風にあっという間に吹き散らされた。なるほど炊事兵が予期せず厨房からグロッグ酒を持参したり、穏やかな夕べが気分を和らげたりするときには、皆が兄弟になり、よそ者をもその輪の中に引き込んだ。誰かが倒れたときには、他の皆がその遺体の傍らに集まり、深い悲しみの眼差しを交わした。しかし、死が雷雲のごとく墓の上に覆い被さるとき、誰もが自分のことを考えた。誰もが暗闇の中にひとり立ち、泣き、喚き、襲来する稲妻に目を眩まされ、その胸中にあるものと言え、際限の無い孤独感ばかりであった。そして彼らが昼間に前哨の茶色く焼け焦げた土手にしゃがみこみ、……戦闘の騒音が止む束の間、軽い冗談を交わして笑い合うとき、しばしば、坑道から幽霊が光の中にそっと忍び出て、誰かを弱弱しく見詰めて、こう問い掛けるのである。「何故お前は笑ってばかりいるのか、何のためにお前は武器を磨くのか、お前は死体の中の蛆虫のように地中で何を穿り回しているのか。明日にはひょっとしたら全てが一夜の夢のように忘れ去られるかもしれないというの<sup>(46)</sup>に。」

3) ユンガーは——しばしば敵味方双方の略奪者の手中に陥る——戦死者の遺品を回収して、遺族に届けることに努めた。上記1)の二つ目の引用文と同一の事例に際して、ユンガーは遺品の回収を伝令兵に命じつつ、犠牲者の母たちに思いを馳せて、次のように記している。

突然眼差しは戻る。はるかに戻って、その意志が我々をこの場に置いたあの国に向けられる。そこには母たちがいる。そしてこの恐ろしい命中弾に倒れた者たちにもそれぞれ母がいる。きっと母たちの多くは、今宵もこう問うたことだろう。「神様、今息子は元気にやっているでしょ

---

(46) *Ibid.*, Nr. 166, 11. 04. 1923, Beilage.

(47) Vgl., Jünger, *In Stahlgewittern*, S. 142.

うか。」そして我々の真ん中で爆発した鉄塊の各断片は、数日ないし数週間の後にもう一度彼女らの心臓に命中するだろう。今日我々に起こった出来事を、母はけっして理解できないだろう。私自身も、劇作家が作品の中に登場させるような、ある理念のために息子が犠牲になることを理解する、あの英雄的な女性を母に持ちたくはない。父はそれと折り合うかもしれないが、母には理解できないままだろう。母は、この出来事に対して、我々の最後の偉大な市民的ドラマを締め括る、次の言葉をもって臨み続けるに違いない。「私にはもう世界が理解できない。」そして明後日早朝我々が突撃に向かうとき、大地は我々の手によって流される血に染まる。……我々を敵と結びつける活動的な問題設定と並んで、母たちのもっと暗い苦悩する問題設定があちこちで立てられる。この戦争から逃れて、これら全てに調和をもたらすことができるようになるためには、ひとは多くを学ばなければならない。ひとは2、3の勲章で満足できないだろうし、栄光と名誉、国家と国民というような概念を承認したり拒否したりすることに終始することもできないだろう。結局、ひとが行き着くのは、なぜ有機的な結合同士の間に敵対関係がもたらされるのか、という問いである。その答えは、なぜ大衆と運動が存在し、なぜ男と女が存在するのかという問いの場合と同様、ほとんど見出せない<sup>(48)</sup>だろう。

---

(48) Jünger, *Feuer und Blut*, SS. 89f.